

平和のための遺書・遺品展——「学徒出陣」80周年—— 開催にあたって	1
凡例	
1 日中戦争から太平洋戦争へ	4
渡辺直己／4 田辺利宏／6 篠崎二郎／8 松永茂雄／10 松永龍樹／11	
田村正／12 横山末繁／13 池田保生／14 戸谷敏之／15 小倉正大／16	
柳田陽一／17 木下浩／18 中村勇／19 中村徳郎／20 永田和生／21	
井上淳／23 大島欣二／24 小倉正久／25 奥村克郎／25 長門良知／27	
石岡俊蔵／27 北川智／28 宇田川達／29 石下英夫／31 竹内浩三／31	
宅嶋徳光／32 上村元太／34 大塚 章／35 浅見有一／36 林 憲正／36	
2 学徒出陣へ	38
深沢恒雄／38 池田浩平／39 吉村友男／40 原 亮／42 岩ヶ谷治祿／44	
蜂谷博史／44 海上春雄／47 板尾興市／48 鈴木康三郎／49 長谷川信／50	
佐々木八郎／51 渡邊太平／52 大塚晟夫／53 市島保男／54 中尾武徳／56	
田中敬治／58 林元一／59 久保恵男／60 鷺尾克巳／61 上原良司／62	
小川清／63 茂木忠／64 松岡欣平／65 加田勉／66 山根明／67	
中島愛作／68 和田稔／69 林尹夫／70 金綱克巳／71 水井淑夫／72	
塩見昭／72 山隅観／73 西澤肇／75	
3 戦後に	76
関口清／76 丸尾至／77 上藤憲三／78 木村久夫／79 白井成徳／80	
稲垣光夫／81	
戦没朝鮮人学生関連資料	82
卓庚鉉／82 韓聖洙／82 廬龍愚／83 趙文相／83	
年表「中国侵略からアジア・太平洋戦争へ」	84
戦時学徒必携「大東亜」略図	85
出品・協力者のお名前	86

# 戦没学生の遺稿

## 1 日中戦争から太平洋戦争へ

関東軍は一九三二年、柳条湖事件から満州事変を起こして満州（東北三省）全域を占領、「満州国」を建国した。国際聯盟にこれを否認されると日本は一九三三年、聯盟を脱退、孤立する。次いで日本軍は華北に侵攻、盧溝橋での日中両軍の衝突を利して、日本は一九三七年、全面的な中国侵略を開始する。当初、北京、南京、広東、武漢を占領したが、中国国民党・共産党等の抵抗は激しく、戦争は泥沼化する。日本は中国の背後に米英ソ聯の支援があるとして、一九四一年、独ソ戦を機に、この包囲を打破して東南アジアの資源と米英仏植民地の占領をめざして「南進」を決定、十二月八日、太平洋戦争に突入する。



わたなべ  
渡辺

なおき  
直己

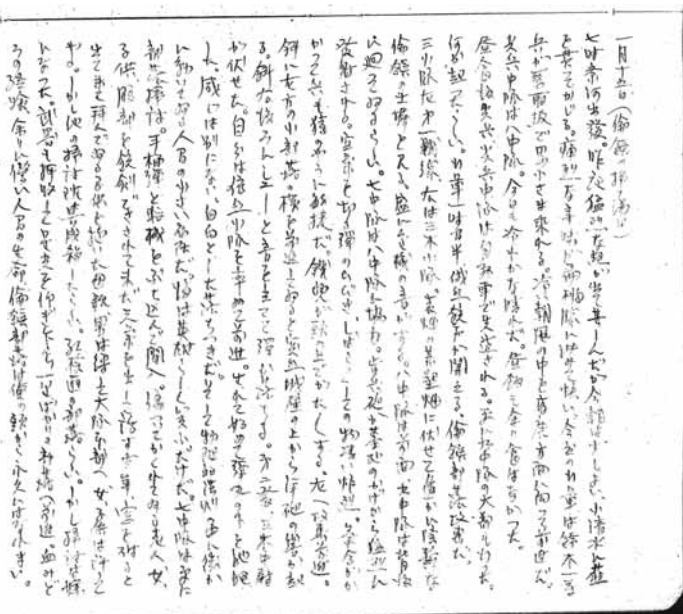
1908年(明治41)6月4日生。  
広島県出身。  
26年(大正15)4月、広島高等師範学校  
文科第一部国漢学科入学。  
30年(昭和5)3月、広島高等師範学校  
卒業。  
31年2月、幹部候補生として陸軍広島  
歩兵第11連隊に入営、同11月除隊。  
31年12月、呉市立高等女学校教諭に  
なる。  
35年1月、アララギ会入会。  
37年7月、充員召集により、陸軍広島  
歩兵第11連隊補充隊に入営。  
37年11月、天津着。  
38年7月、天津から華中に転戦。同年  
12月、天津に戻る。  
39年8月21日、官舎の浸水による石灰  
爆破により死亡。戦死扱いとなる。  
享年31歳

### 渡辺直己『陣中日記』

一九三七年二月二三日〜一九三八年一月三一日

一九三八年一月十五日

「前略」麦畑の荒墾畑に伏せて遙かに陰鬱な倫鎮の土塀を見る。盛に重機の音がする。八中隊は前面、九中隊は背後に廻つてゐるらしい。七中隊は八中隊に協力。歩兵砲が墓地の陰から猛烈に発射される。空気を切る弾のひびき、しばらくしての物凄い炸裂、気合いがかかつて兵も猿のやうに敏捷だ。鉄兜が頭の上でがたがたする。左へ攻撃前進。斜に左方の小部落の横を前進してゐると突然城壁の上から野砲の響が起る。斜右後ろにシューと音を立てて弾が落ちる。第二発、三木中尉が伏せた。自分は依然小隊を率ゐて前進。生れて初めて弾丸の下を馳駆した。感じは別れない。白白とした落ちつきだ。そして物理的法則の中に微かに動いてゐる人間の小さい存在だ。

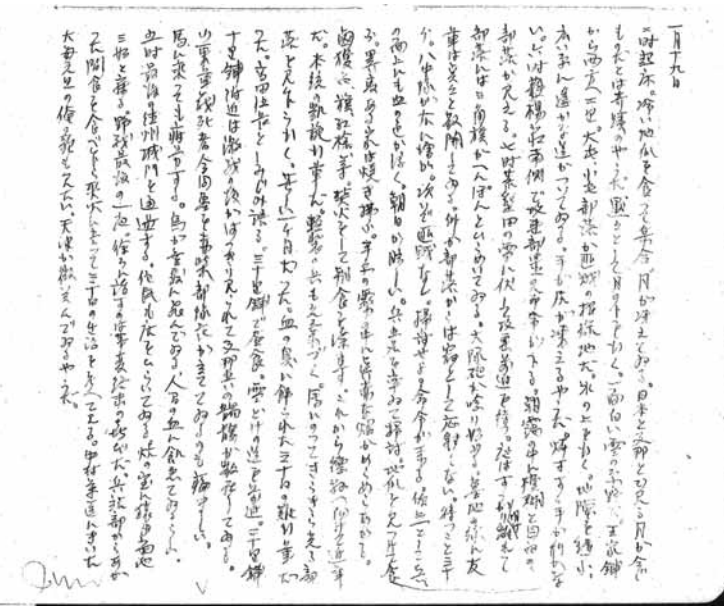


後は英雄らしく笑ふだけだ。七中隊は更に部落掃討。手榴弾と軽機をぶち込んで闖入。傷ついてかくれてゐる老人、女、子供、腹部を銃剣でさされて未だ元氣を出して話す少年、窓を破ると出て来て押んでゐる子供を抱いた母親、男は縛して大隊本部へ、女、子供は許してやる。しかし他の掃討班は可成殺したらしい。紅槍匪の部落らしい。しかし掃討は嫌になった。武器も押収して星光を仰ぎ乍ら一里ばかりの部落へ前進。血みどろの経験、あまりに儂い人間の生命、倫鎮部落は俺の頭から永久には

なれまい。

一月十九日

「前略」夜はすっかり明け離れて部落には三角旗がへんぼんとひらめいてゐる。大隊砲が唸り始める。墓地の線に友軍は点々と散開してゐる。所が部落からは寂として応射しない。待つこと三十分。八中隊が右に増加。次いで匪賊なし。掃討せよの命令が来る。欣然として兵の面上にも血の色が浮く。朝日が眩しい。兵五名を率ゐて掃討。地瓜を見つけて食ふ。異変ある家は焼き払ふ。平原の霧の中に真赤な焰がめらめらあがる。……苦しい一ヶ月だった。血の臭に飾られた三十日の難行軍だった。高田伍長としみじみ語る。三十里舖で昼食。雪解けの道を前進。三十里舖、十里舖附近は激戦の後がはつきり見ら



れて支那兵の髑髏が散在してゐる。山東軍戦死者合同墓を赤柴部隊長が立ててゐるのも痛ましい。馬に乗つても疲労する。鳥が無数に飛んでゐる。人間の血に飢ゑてゐるらしい。

### 渡辺直己『渡辺少尉手簿』

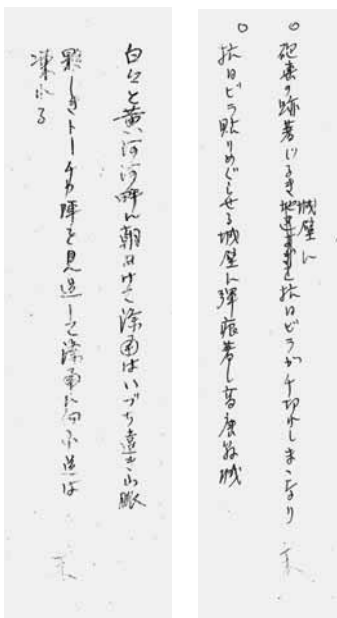
一九三八年二月一日〜五月二五日

三月十一日

思考と云ふ事を極力怖れてゐる自分の意識をふと見出して耐らなく寂寥を感じる。無常とか変転とかがこんな切実に身に沁みて感じられる事もない。北支聖戦の下にボヘミアンの深い孤独と興奮と痴呆の状態とが狂ほしいまでに錯綜して来る。死とか絶望とかそんなものなるべく考へたくない。そして只現在と未来との白白とした瞬間に生きてゐるだけだ。思索を奪はれて野獣のやうな獯猛性に生きて行く生活、時に青い空を見て自己自身を悟る時慄然として来る。

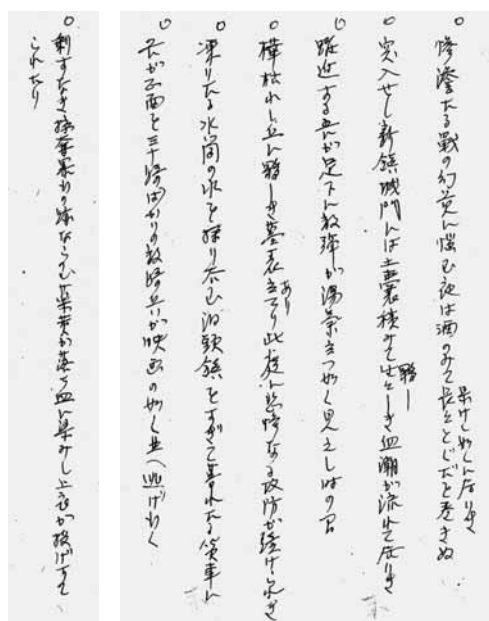
### 渡辺直己『陣中日記』

一九三七年一月二三日〜一九三八年一月三一日



砲撃の跡著じるき城壁に抗日ピラが千切れしままなり

抗日ピラ貼りめぐらせる城壁に弾痕著し高唐県城白白と黄河河畔に朝あけて済南はいづち遠き山脈夥しきトーチカ陣を見過して済南に向ふ道は凍れる



惨憺たる戦の幻覚に悩む夜は酒のみで長々とぐだを巻きぬ突入せし新鎮城門には土囊積みて生々しき血潮が流れて居りき  
あり  
樺枯れし丘に夥しき墓表立てり此処に悲惨なる攻防が続けられき  
吾が生還を知りたる朝は陰膳に生きたる鯛を供へたりと  
ふ  
刺すなき掠奪暴行の跡ならむ葉莢が落ち血に染みし上衣が投げすてられたり

○未だ血の海の中の身が上敷きで鳥糞し十重神の道

○戦終りて子し却ては月照ればおまがらふ松並の道

○鉄兜打りて母を叫ぶ部下を二夜トトラックに守りて進撃を

○雲残る地際を望んで敵戦徒屋に掛けし返りて血を噴き出しぬ

○去りておぼしし却ては新しきと燃あつて朝明の中へ燃えて行きたり

○朝明けし遠くまで戦屋に陽光まで

△瞬しるに敵隊は混戦で我の戦いも苦味し

○この眼と心はわすれずと進む

○そのかた栄華の光が夜明湖へ今宵の雨の白くとおぼし

○國を便けてつくりし栄華の光が夜明湖へ今宵の雨の白くとおぼし

未だ血の滲みて臭ふ丘越えて烏糞し十里舗の道

鉄兜打ち貫かれたる部下を一夜トトラックに守りて進撃をつづく

吾が襲ひし部落赤々と焰あげて朝明の中に燃えて行きたり

國を傾けてつくりし栄華の前にして頭垂れ居り戦ひ人吾は

### 渡辺直己『手簿2 ノートブック』

一九三八年五月二六日〜七月一六日

#### 九月号歌稿

巧なる日本語の反戦ポスターが堆くありき阜寧の城に日本兵に告ぐとふ激烈なる文字を城壁にまぎまぎと白く書き記したり

巧なる日本語の反戦ポスターが堆くありき阜寧の城に

日本兵に告ぐとふ激烈なる文字を城壁にまぎまぎと白く書き記したり

入りかける部隊に敵一連隊を破りつづけさまに前進をまげぬ

吾が傍にまりし兵が忽ちに肩射ぬかれて血を噴き出しぬ

血糊車小し石畳の道を辿りわき持奪すれし穴と核ぶる

腐爛となりしせえ華の光を今宵も又つづくと書き記し

去りておぼしし却ては新しきと燃あつて朝明の中へ燃えて行きたり

吾が傍に來りし兵が忽ちに肩射ぬかれて血を噴き出しぬ

紫陽花に蠅のとまれる風景を思ひ出し居りトラックの中に

赤々と部落に咲ける葵の花を麦熟るる花と支那人は云ひき

匪影なしと鳩を放ちて泥屋に三時間は腐りたる如く眠りぬ

血糊垂れし石畳の道を辿り行き掠奪されし家を検ぶる

吾が後に召されて既に死せる友数へつつ何かはるけきが如し

「日中戦争従軍中、華北の東站警備隊長を務めていた時期の作。雑誌『アララギ』一九三八年八月号と九月号に投稿した歌の原稿」

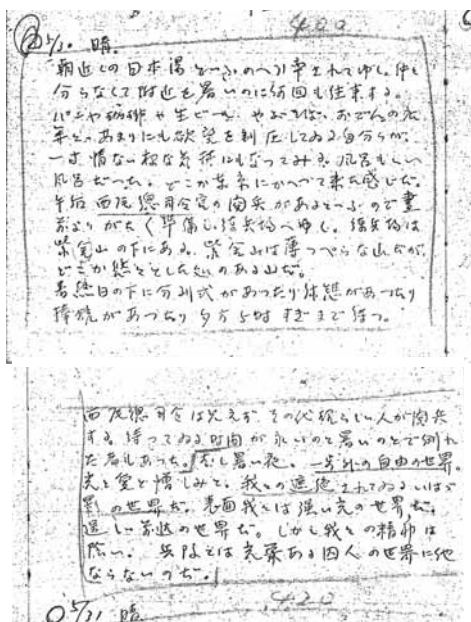
## 田辺 利宏



1915年(大正4)5月19日生。  
岡山県出身。  
30年(昭和5)4月、上京して神田の帝国書院に勤めながら、法政大学商業学校に通う。  
34年4月、商業学校を卒業し、日本大学予科文科科に入学。  
36年3月、同大学法文学部文学科英文科進学、39年3月卒業。  
39年9月、広島県福山市の増川高等女学校に勤め、英語と國語を教える。  
39年12月、松江にて陸軍入營。後中国各地を転戦。  
41年8月24日、中国江蘇省北部にて戦死。  
享年26歳。

## 田辺利宏『戦線日記』

一九四〇年五月



五月三〇日 晴

「前略」むし暑い夜。一步外の自由の世界。光と愛と憎しみと。我々の遮絶されてゐるいはば影の世界だ。表面我々は強い光の世界だ。逞しい前進の世界だ。しかし我々の精神は陰い。兵隊とは光栄ある囚人の世界に他ならぬのだ。  
（一九四〇年五月三〇日）

### 秋岡都宛 田辺利宏軍郵便書簡

一九四〇年五月二四日

御手紙有難うございました。  
皆様御元気の由何よりです。

小生も益々元気で其後軍務に精励してゐます。

……昨日ははげしい雷雨の日で、一日中物凄い雷鳴が鳴

やう紙有難うございました。  
皆様御元気の由何よりです。  
小生も益々元気で其後軍務に精励してゐます。  
……昨日ははげしい雷雨の日で、一日中物凄い雷鳴が鳴  
やう紙有難うございました。  
皆様御元気の由何よりです。  
小生も益々元気で其後軍務に精励してゐます。  
……昨日ははげしい雷雨の日で、一日中物凄い雷鳴が鳴

りつづけました。内地の雷とちがって非常に逞しく感心しました。兵隊は雨が降ると全く手持無沙汰なので、ハ一モニカを吹いたり故郷の話をしたり女の話をしたりなどして怪しい気持を紛らしてゐました。  
先日二十里ばかり先の分屯地へトラックで連絡にゆき久しぶりで平原の風の中を走って来ました。

を酔はすやうでした。かへりに夕立に会い、びしょ濡れになりましたが、それもいい気持でした。「中略」  
北支といつても残敵が尚多数蟠踞して居り、討伐も度々あります。最近はもう弾が当たらない自信が出来てしまひました。悪運が強いのでせう。  
この間までバラが美しく咲いてゐました。少女たちは髪に野バラの紅いのを挿して城外の流れへ水を汲みに行きます。野生的ないい趣好です。「中略」  
お体を大切にしっかり御孝行して下さい。  
二十四日

秋岡都様

田辺利宏

又々おはやくに帰りたい。運の悪い日か。針線の手は  
目ざつておかりました。大々運何のほとりに文那の農  
民は丁度お救の手帳ととら生れをいぢるおます。  
豚や鶏馬の産が一踏にあてるおます。まづ裸ぢぢぢ  
てのお子供も快いおます。まづお母はよくなつてお  
してお田舎のお供をへつてお走りおます。おとちも裸ぢぢぢ  
運の悪い日か。針線の手は  
目ざつておかりました。大々運何のほとりに文那の農  
民は丁度お救の手帳ととら生れをいぢるおます。  
豚や鶏馬の産が一踏にあてるおます。まづ裸ぢぢぢ  
てのお子供も快いおます。まづお母はよくなつてお  
してお田舎のお供をへつてお走りおます。おとちも裸ぢぢぢ

お体も大切にしっかり御孝行して下さい。  
二十四日  
田辺利宏

### 田辺利宏『従軍詩集』

望郷

丘陵地帯の歩哨線に  
もう薄の穂が風にひかる。

永い困苦欠乏のこの作戦に  
いつも思ひ出されるのは  
音信の全く絶えた故郷のことだ。  
我々の原駐地には  
もう束なす祖国からの便りが  
我々のかへりを待つてゐることだらう。  
荒寥たる生活に堪へてゐる兵隊たちは

丘陵地帯の歩哨線に  
もう薄の穂が風にひかる。  
永い困苦欠乏のこの作戦に  
いつも思ひ出されるのは  
音信の全く絶えた故郷のことだ。  
我々の原駐地には  
もう束なす祖国からの便りが  
我々のかへりを待つてゐることだらう。  
荒寥たる生活に堪へてゐる兵隊たちは

戦火よ、昨日の赤い花のやうに忘れられ  
 我々に静けさこそ平和とを喫へてくれ。  
 蛆の湧く屍体と血と蠅よ。  
 澄みきつた朝風の中に消えしゆり、  
 我々は玲瓏な歴史の表紙を開かう。  
 丘陵地帯の歩哨線に  
 もろ薄の徳が風にこぼれ。  
 糸も近い前線は  
 心ごとくふもよごし思ひ出されうらむ。  
 (一九三七、二九)

滅多にあがらない煙草を根元まで吸ふために  
 竹のパイプを作りながら  
 家のこと、あまいものことなど話し合つて  
 地の果の寂寥を幻想で癒やすのだ。  
 毎日敵都爆撃の飛行機がとぶ。

戦火よ、昨日の赤い花のやうに忘れられ  
 我々に静けさと平和とを与へてくれ。  
 蛆の湧く屍体と血と蠅よ。  
 澄みきつた朝風の中に消えてゆけ。  
 我々は玲瓏な歴史の表紙を開かう。

丘陵地帯の歩哨線に  
 もう薄の穂が風にひかる。  
 秋も近い前線では  
 ひとしほふるさどが思ひ出されるのだ。

(二五・七・二九)

篠崎 二郎



1910年(明治43)3月2日生。  
 奈良県出身。  
 同志社大学予科を経て、31年(昭和6)、同文学  
 部英文学科進学。  
 35年卒業。新聞記者記者を希望するが果た  
 せず、大阪市立東第二商業学校の英語科の  
 教員となる。  
 37年2月、結婚。  
 37年11月、大阪通信局通信講習所英語科教官  
 となる。  
 38年4月、補充兵として応召、奈良の陸軍歩  
 兵第38連隊に入営。  
 38年8月、南京の支派遣軍岩松部隊司令部  
 付となり、新聞班に配属。のち警備班に配  
 属。  
 40年1月、前線に配置され、討伐戦に参加。  
 40年5月、召集解除。  
 41年1月、女兒誕生。  
 41年8月、再度応召。  
 41年9月、平壤の尼崎隊に所属。後、南海派  
 遣軍に属し、東部ニューギニアに転戦。  
 44年1月18日、東部ニューギニアにて戦死。  
 享年33歳。

篠崎寿子宛篠崎二郎軍事郵便書簡

一九三九年二月付

第六十一信

七十四・五信落手しました。多忙で暫らく文通おくれ  
 すまなかつた。絶へず気になりつゝ、疲れて寝るので仕  
 方なく…。其后相変わらずの張り切りです。最近情報活  
 滲です。一面復興都市のN市も相変わらず潜入分子活動し、  
 全市は悪化しつゝあります。上海のテロ化と相通じてあ  
 ます。警備司令部だけあって小生らの緊張特別です。日  
 直も十一時迄、相当なもの。当市と相対峙して近効「郊」  
 の守備地区も大討伐をやつてゐます。江南地区も(全面的  
 に重慶政府の密令らしい)活澆となりました。

今日は不幸なニュースを書かねばならぬ…と云ふのは

第六十一信  
 七十四・五信落手し、多忙で暫らく文通おくれすまなかつた。絶へず気になりつゝ、疲れて寝るので仕方なく…。其の後は相変わらずの張り切りです。最近情報活滲です。一面復興都市のN市も相変わらず潜入分子活動し、全市は悪化しつゝあります。上海のテロ化と相通じてあります。警備司令部だけあって小生らの緊張特別です。日直も十一時迄、相当なもの。当市と相対峙して近効「郊」の守備地区も大討伐をやつてゐます。江南地区も(全面的に重慶政府の密令らしい)活澆となりました。今日は不幸なニュースを書かねばならぬ…と云ふのは

山中大隊は八七名、中隊は三三名と別時、果敢に戦つた。然敵主力と衝突、直ちに討伐に移つたが、三日三晩の追撃戦に多数の行方不明と戦死を聞ひたが、本部への情報により、山本大隊だけで八十名近く、中隊だけで二十名と判明、思はず黙算を捧げました。奥ノ坊、坂本、第三機関銃隊等各々相当出でてゐます。今は再起不能に陥つてゐるそうです。お前も朝夕仏前に愛靈を悼んでやつて下さい。今日はそのニュースに哀悼の日でした。  
 かくの如くN市を中心に江南地区は旧正を控へ緊張です。敗残兵、土匪、大刀会匪、正規軍、雑軍には閉口です。